池田大作の教育思想—女子教育の観点から（４）

—草創期の創価女子学園における創立者と学園生の絆に着目して—

富　岡　比呂子

はじめに
１．調査の概要
　①　本研究の目的
　②　調査対象・時期
　③　調査内容
　④　倫理的配慮
　⑤　分析方法
２．結果
　①　当時の学園生活に関する質問
　②　今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問
　③　その他の質問
３．考察・まとめ
　①　創価女子学園の思想的基盤－３年間の学園生活の意味づけとは
　②　卒業生に見られる共通性－前回の調査と比較して
　③　おわりに

はじめに

本研究は、2009年より著者が行っている草創期における関西の創価女子中学・高等学校（以下、創価女子学園）の教育思想の研究の追加調査をまとめたものである。創価大学の創立者である池田大作（以下、池田と記す）と卒業生や教職員との関係、草創期の学園の様子などを通して、池田が女子教育に期待していたこと、女子教育の精神的基盤、また卒業生たちに共通して見られる特徴などについて、今までの調査結果をふまえたうえで考察していきたい。一昨年の調査[(1)]では、高校１期から７期までの卒業生にインタビューを行い、学園の志望動機や印象に残っている

(1) 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（２）—」創価教育研究所『創価教育』３号、2010年、15－42頁。

Hiroko Tomioka（創価教育研究所講師）

行事、創立者との出会いや学園生活の現在における意味づけについてさまざまな回答を得ることができた。そこでは多くの調査対象者が、３年間の学園生活を自身の人生を方向づける精神的基盤として大きくとらえていることがわかった。特に創立者の池田との出会いや、彼から受けた指導が、対象者たちのその後の人生の方向性や価値観に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

さらに、昨年の調査[(2)]では、草創期に教員として勤務していた女性２名にもインタビューにご協力いただき、教員の目から見た学園とはどのような場所であったのか、また教職員という立場で学園建設に携わり、創立者と関わる中で、何を経験し、どのように感じたのかについて率直に語っていただいた。この調査では教員の視点から見た女子学園の状況について新たな知見を見出すことができ、創立者と生徒の関係を第三者である教員の立場から考察することができた。教員へのインタビュー結果を概観すると、卒業生にとってだけでなく、当時の教職員にとっても創立者の存在は非常に大きく、彼を人生の師匠として尊敬する姿勢は、卒業生と教職員のインタビュー回答にも共通してみられる観点であることが明らかになった。

以上のような結果をふまえて、本研究では前回の調査に協力いただいた元教員からの紹介などを通して主に中学１期、高校１期という草創期の卒業生を中心に、追加の聞き取り調査をおこなうことにした。前回と異なる点としては、調査対象者の経歴があげられる。一昨年の調査では、９名中７名が結婚を期に職場を退職し、家庭に入ることを選択した専業主婦という立場であったが、今回の調査では小学校の教員や日本語講師、通訳など、現在も職業を持ち、働き続けている女性が半数以上を占めている。卒業後、家庭だけでなく社会においても活動を続けてきた女性の視点から見た草創期の学園や創立者についての思いを語ってもらった。創価女子学園での記録を当時の在校生の観点から残していくことは、今後の池田思想の研究において有益な示唆が得られるものと考えられる。特に、卒業して30年以上たった現在、３年間もしくは６年間の学園生活や創立者との出会いが対象者たちにとってどのような意味をもっているのかについて掘り下げて考察していきたい。

１．調査概要

①　本研究の目的

創価女子学園での経験を通して、卒業生の内面にどのような変化があったのか、また、卒業後30年以上を経た現在、彼らが学園生活、また創立者をどのように意味づけているのかを探ることを目的とする。学園の志望動機、印象深い行事や創立者との出会いについて聞き取る中で、学園生活がその後の進学・職業選択、結婚・子育てにどのような影響を与えているかを、インタビューをもとにしたオーラルヒストリーの中から分析考察する。本研究は質的・記述的研究であり、対象者自身の語りを基本にした分析をおこなう。

---

(2) 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（３）―」創価教育研究所『創価教育』４号、2011年、170－189頁。

② 調査対象・時期

調査対象は、関西女子学園（創価女子学園）の草創期の卒業生９名。2010年９月から2011年11月にかけて聞き取り調査を行った。半構造化インタビュー方式で、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音を行った。インタビューはすべて個別に筆者が行い、かかった時間は一人当たり平均１時間～２時間であった。対象者のうち１名は関西在住のため、電話およびFAXにてインタビューを実施した。

③ 調査内容

前回の卒業生への調査と同じインタビューガイド（表１参照）を用いて回答を得た。本人の自発的な語りによる自然な流れを重視したため、インタビューガイドにある質問項目以外にも出てきた対象者の語りも分析対象とした。質問会話の内容は、録音した音声ファイルをもとに逐語語録を作成してデータとして使用した。このほか、基礎資料として、現在の職業、結婚前の職業、子どもの有無など個人の属性に関する情報も収集した。

【表１　インタビューガイド】

【インタビューガイド】

１．当時の学園生活に関する質問

ａ．学園を志望した動機について教えてください。

ｂ．学園生活はどのような体験（経験）でしたか。

ｃ．学園生活についてどのように感じていましたか。

ｄ．学園に入学する時と在学時、卒業時と自分の中に変化はありましたか。

ｅ．学園生活の中で特に印象深いことをあげるとしたら、なんですか。

２．今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問

ａ．今となって学園生活はあなたにとってどのような意味をもっていますか。

ｂ．もし、高校１年生に戻って、学園生になるとしたら、また学園生になりたい（学園生活を送りたい）と思いますか。

ｃ．今になって思う自身の学園生活のよかったところ、反省点はありますか。

ｄ．今も心に残っている創立者の指導や原点があれば、教えてください。

ｅ．もし子どもができたら、学園に入れたいと思いますか（もしくは、もうすでに入学させていますか）。

④　倫理的配慮

対象者には、調査への協力を依頼するにあたって、研究の目的及び方法を明示したうえで、研究への参加・辞退は自由意思によるものであること、答えたくない場合は答えなくてもよいことを伝えた。さらに、データは個人が特定されないよう処理し、データおよび録音したファイルは厳重に保管しプライバシーの保護を厳守する旨を明記した調査依頼書を渡し、口頭での説明をおこなったうえで調査協力の承諾を得た。

⑤　分析方法

データ分析においては、対象者が語ったライフヒストリーを語られるままに記述し、構成した。そのため、結果の項の回答欄では「です・ます」体と「だ・である」体、また体言止めなどの表現が混在しているが、これは対象者の語りを忠実に表記したものと考えていただきたい。分析方法については、一昨年の富岡論文[3]を参照のこと。

2．結果

対象者の背景

調査対象者については表２に記した。期別は高校１期生（1973年入学）が５名、中学１期生（高校４期生）が２名、中学５期生（高校８期生）が２名の合計９名となっている。現在の職業は専業主婦が３名、非常勤を含むと小学校教員が３名、日本語教師が１名、翻訳や通訳など語学系専門職が２名となっている。全員既婚者であり、子どもの数は１児から３児であった。結婚前の職業は一般企業や外資系企業、テレビ局、創価学会本部の職員など多岐にわたっていた。

【表２　調査対象者のプロフィール】

	表2　調査対象者のプロフィール			
		期別	現在の職業	結婚前の職業
1	A	中1・高４	主婦	一般企業
2	B	中1・高４	同時通訳	外資系企業
3	C	中5・高８	翻訳	テレビ局プロデューサー
4	D	中5・高８	主婦	創価学会本部職員
5	E	高1	主婦・日本語講師	一般企業
6	F	高1	主婦・小学校講師	関西創価小教員
7	G	高1	小学校校長	小学校教員
8	H	高1	小学校校長	小学校教員
9	I	高1	主婦	創価学会本部職員

①　当時の学園生活に関する質問

ａ．学園を志望した動機について教えてください。

インタビューの最初の質問は学園を志望した動機についてであった。創価女子学園を受験する

[3] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、18頁。

背景には、家族の勧めや本人の希望などさまざまな要因があったと考えられる。以下のような語りが見られた。

「親が勧めてくれました。当時、父が商社マンでアフリカ（タンザニア）に住んでいたので、学園の受験のために日本に帰ったという感じです。私はもっとアフリカにいたかったんですけど、親が学園に入れたいと思って。（受験当時は）私には特に深い動機はなかったんですけどね。」（Ｂさん）

「小学校６年の時、大阪に池田先生が作ってくださる女子学園ができることを母から聞きました。『行きたい？』と問われた時、『行きたい!!』と即答したことを昨日のことのように覚えています。母は聖教新聞に掲載されたことで関西に女子校が開校されることを知りました。」（Ｉさん）

「小学校４年の時に創価学園の開学の話がありました。（池田）先生のことは色々な人から聞いていて、そのとき、『先生に会いたい！』と思いましたが、当時は男子校だったから行けないし、残念だと感じていました。ですが、私が中１になるときに女子学園ができると聞いて、『みんなが大好きな、先生が作った学園に行きたい！』と思ったんです。特に理屈とかはなくて、それだけなんです。『みんながこれほどまでに大好きな先生、先生に会いたい』『先生の作ってくれた学校だから行きたい』という気持ちでした。」（Ａさん）

「小学校４年の時に父が亡くなって、そのときの激励で家に来てくださった方から『大阪に創価学園があるよ、行ったら』というお話を聞きました。それで学園があるってわかって。私自身は大阪生まれで、小学校は岡山県でしたので、入学してからは寮に入りました。」（Ｃさん）

「東京の新宿出身、信濃町に住んでおりましたので、小さいころから先生にお会いする機会もありました。志望の動機の一つは先生が作られた学校だということと、あと身近な先輩も学園に入ったので、私も行きたいなと思ったんです。私には１歳下の妹と７歳下の弟がいたのですが、小学校５年の時に家族で関西学園に見学に行ったときに、ちょうど先生にお会いして『学園にいらっしゃい』と言葉をかけていただいて。私も妹も中学から学園に入学させていただきました。」（Ｄさん）

「小学校５年か６年の時に、新聞で関西学園ができると聞いて、記事を見せてくれた人がいたんです。行ったらどうかと。あの当時、（創価学会第二代会長の）戸田先生の話はダイレクトにわかる、すごい人だなと思っていた。でも、池田先生のことをすごいという人がいたけど、どうしてすごいんだろうと思っていたんです。そこで、『池田先生という人はどういう人なんだろう？もっと知りたい』と思ったんです。もし、本当に池田先生のことを知ったら尊敬もできるだろうと思って。山口県出身だったので受験の前に見学に行きました。親は賛成でしたけど、学校の先生は賛成ではなく、県立を勧められましたが、学園を受験しました。」（Ｅさん）

「小学校の時に、創価大学ができると聞いて、行きたいと思ったんです。そして、ちょうど高校１年の時に学園ができると聞いて、親に行きたいと言って、受験しました。自分の人生の中でも、中学の時は一番勉強したのではないでしょうか。特に、中２、中３のときは一番勉強しましたね。クラスで１番で、学年でも何番かでした。」（Ｈさん）

「最初は共学だと思っていて、友達に聖教グラフを見せたりしていたら、あとで男子校だとわかってシ

ョックを受けたんです。ちょうど中２のときに関西に女子学園ができると知りましたが、うちは両親とも身体に障害を持っていました。家計はかなり貧しく、『え、学園？誰が行くの？』みたいな感じで、最初両親は私が学園に行きたいと言うとびっくりしていました。ですが、私の真剣な思いが伝わったのか、『受けるだけ受けなさい』と言ってくれたんです。そのとき、親はむしろ落ちてくれた方がありがたいと思っていたと思いますが……受験することで私の気がすむだろうと思ったのでしょう。

そして関西学園の受験の日に、全盲の父の手をひいていった記憶があります。そのときに面接官の先生が父に、『おたくは経済的に大丈夫ですか』と聞かれたんです。私はその時、きっと父が『家は厳しいんです』と言うだろうと思っていました。しかし父の『確かに経済的には厳しいけれども、娘の“どうしても先生のもとに行きたい、先生に一目でもお会いしたい！”という思いを受けて、私たちは娘に学園の土地を一度でいいから踏ませてあげたいと思っているんです』という言葉を聞いて、父がここまで思ってくれているんだと知って心から感謝しました。このように、自分の中で、『先生の作られた学園に行きたい』という思いだけで来たのですが、実は周りも後押ししてくれたという背景があります。一家をあげて何としても学園にという思いがあったんです。両親は大変な中、私を学園に入れるだけではなくて、下の弟も、創価大学に入れてくれたんです。２人の子どもが親元を離れてしまって、（障害があるにも関わらず）両親だけで生活させてしまったのは申し訳ないと思いますが……当時は世間的にはありえないですよね。」（Ｇさん）

これらの回答をみるとＢさんとＩさんは親の勧めで、ＡさんとＣさんは知人の影響で、学園を受験することを決意したことが読み取れる。特に、Ｂさんのように海外からわざわざ創価女子学園の受験のために帰国したという回答も見られた。また、Ｄさんのように、小学校の時から池田を身近に感じる機会があったり、実際に声をかけられる機会に恵まれたという回答もあった。また、Ｅさんは戸田第二代会長のことは知っていたが、池田のことはよくわからなかったと語っており、彼をよく知りたいと思ったことが、志望動機につながったとしている。ＨさんとＧさんに関しては、本人が受験を希望しているが、なかでも両親とも障害を抱えた家庭のＧさんは、経済的にも厳しい状況の中、何としても娘を学園に入れたいとの両親の熱い思いが読み取れるエピソードを語ってくれた。この両親の思いに報いたいと、Ｇさんは女子学園卒業後、創価大学に進学し、その後小学校教員として活躍する中、ついには関西女子学園初の女性校長となる。彼女は、自身をふりかえって「このこと（校長職に就くという職場での実績を示せたこと）で、親に少しは恩返しができたかなと思っています」と語ってくれた。

このように、両親、先輩、知人など身近な人たちの勧めによって志望に至ったということがわかり、また志望の動機も多岐にわたっていることがわかった。

ｂ．学園生活はどのような体験（経験）でしたか。

ｃ．学園生活についてどのように感じていましたか。

この２つの質問は、対象者からすると抽象的すぎて答えにくいようであり、またこの２問に対する回答も重複していたので、一つにまとめることとした。

「むちゃくちゃ楽しかったですね。毎日の生活そのものが楽しかった。振り返ったら異常かなと思うけど（笑）、当時はそれが普通だったんです。クラブも委員会もすべて高１の先輩たちと一緒でした。あの

ときは中１でしたから、３学年違うと全然違いますよね、高１のお姉さんと比べて。学園を作っていくんだという、伝統を築いていくんだという今から考えると生意気なことを考えていましたね。勘違いも甚だしいんですけど。（中２、中３の）先輩がいないということもあって、のびのびと、というか好き放題やらせていただいたような記憶があります。男子がいないから、異性の目を意識することがないのもよかったですね。そのうえで、いい意味での上下関係、高校生のお姉さんを見て憧れたり、お手本にしたりというのはありました。」（Ｂさん）

「宝石のような感じ。宝物のような、人生の中でも二度とない、最高の環境で学ばせていただいたと思います。校内に蛍もいましたし、教員の先生方との付き合いも深かったし、本当に楽しかったです。」（Ｅさん）

「大変に楽しかったです。人間の切磋琢磨を寮で磨いていただいたり、鍛えていただいたかなと。『先生を求める』っていう部分は、学園に入ってからすごく教えていただいた。一人ではそういうことがなかなかできないですよね、最大の訓練の場だったと思います。私にとっては関西というのが衝撃的だった。関西というところに行けたというのも、私にとってはよかった。この（中学・高校の）６年間が私の人生における一つの大きなエポックでした。関西には独特の気運があると思います。師匠を求めていく、師匠と一緒に築き上げたという、そういうものを強く持っている。学園の先生方もそうでした。貴重な、人生の基盤となるような衝撃的な経験でした。」（Ｄさん）

「関西は東京と違って、常に先生が来られるという状況ではなかった。関西指導の折に寄られるという感じですよね。だから、『自ら創立者を求めて、出会いを作っていく』という考えがありました。（創価大学に入学してからは）大学だと、『先生が来てくださる』という感じになり、いい意味で近くなったけど。でも、自分から能動的に創立者を求めるという姿勢は学園のときに培ったものです。」（Ｄさん）

「（私は）ただ勢いだけで入ったので、勉強はあまりできなかったと思います。やる気満々の子がいるのをみて、はぁ…（自分とは違うな）と思ったり。でも、素晴らしい友達が多かったです。先生の思いやご期待に何らかの形で応えたいとみんな思っていたと思います。最初のカルチャーショックを通り過ぎると、伝統を作るんだという思いが一人一人に生まれてきて、何にでも積極的に活動するようになりました。たとえば、バレーボール大会などの、１つ１つの小さな行事にも意味づけをして、意義を込めて、みんなで相談するようになったんです。普通の学校だと思って入ってきた人には、この学校はいったい何なんだろう？という感じだったと思いますが（笑）」（Ｇさん）

ＢさんやＥさんにみられるように、とても楽しい体験だったと同時に、人生の基盤となる人格を鍛えることのできた貴重な時期であったとの回答が多かった。また、東京出身であるＤさんが関西の土地で教育を受けたことを振り返る語りは、関西という風土が、関東とは異なる独特の雰囲気を持っていたことがうかがえた。池田には創価学会会長としての顔があり、東京を基盤に活動していたことをふまえて、地理的な状況下における関西と東京の違いについて言及しながら、関西での学園時代に、創立者を能動的に「求める」姿勢が培われたと語っており、創価女子学園での６年間がその後の彼女の人生に少なからず影響を与えた可能性が示唆された。

学園生活をどのように感じていたかについての問いについては、以下のように入学してから心の葛藤があったことを示す回答も見られた。

「（学園に）願いに願って入ったにも関わらず、（出身地の）長崎の佐世保では自分は人材だと思っていましたが、学園にはもっとすごい人材がたくさんいたので、最初は委縮してしまいました。自分はもっと活躍したいのに、その場がないので、『こんなはずじゃないのに…』と思っていた。そこで、友達には言えませんでしたが、担任の先生にだけ自分のみじめな心を相談したんです。『みんなが立派に見えるんです』というと、『それはあなたの心がせまいからだ』と言われた。そして、心を前向きにしてもらったんです。３年間かけて、自分の委縮した心を直したんです。」（Hさん）

「先生の作られた学校に行く喜びと不安、創立者が描かれている学園生に自分がなれているのかなという自信のなさ、力がないんじゃないかという不安もありました。『先生が娘と呼んでくださる、自分が果たしてそれに値する人間かどうか』という葛藤もありました。先生が私たちが地方から出てきてさみしいだろうから、『お父さん』と呼んでいいんだよと言ってくださって。でも『娘』って呼んでいただくには、そこまで至っていないなという感じもあった。入学式の指導を聞いて、青春時代は心が揺れ動くから、大丈夫だよというところを聞いて安心しました。自分の生き方の前には先輩がいないので、自分で道を探していくしかないという感じでした。」（Hさん）

上記のHさんの語りに出てくる青春に関する指導は、第１回の入学式で池田が青春に言及した箇所があるのでそれを紹介したい。彼は「だれでも、青春時代というものは、長い人生のなかでもっとも華やかで楽しい時代だと思いがちでありますが、実際はそれほど楽天的になれるものでもなければ、無条件に楽しいというものではないことを、私はよく知っております。むしろ、無限の可能性を前にして、非常に不安定で落ち着きがなく、鋭敏な神経がつねに働いているといったほうが、実情に近いかもしれない。否、実情であろうと思います。（中略）青春は無限の歓喜とともに、またかならず心労がある、悩みがある。これは表裏一体であることを忘れてはならない。それを知って戦っていくところに輝かしい青春時代がある。」[(4)] と述べており、青春という時期の持つ不安定さについてふれながらも、その中で自身を磨いていってほしいと新入生に期待を寄せている。Hさんは、理想の『学園生』や創立者の『娘』としてのあるべき姿と現実の自己とのギャップに悩んでいたようであり、また自分よりも優れて見える人材が多く感じられて、自信を失い委縮してしまったという。だが、担任の先生に相談しながら高校３年間をかけて「自分の委縮した心を直す」ことができ、精神的にも成長したことがうかがえる。

ｄ．学園に入学する時と在学時、卒業時と自分の中に変化はありましたか。

この問いに関しては、ほとんどの対象者が「変化があった」と答えていた。

「入学する前は、すごく心が不自由だったんですが、学園に入って、本当に心が自由になりました。先生にありのままを受け入れてもらえた安心感、何も繕うことなくね。自分たちの学園が誇りだからきちっとする、お行儀よくして、きれいな言葉遣いを心がけるのは当然でした。でもこれは誰かから強制されるというよりは、自分たちで、『学園生として何ができるのか』と考えてやったことだから、縛りでは

(4)「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、229－231頁。

なく、あくまでも心は自由だったんです。これが先生が作ってくださった社会だと思います。自分たちで自由に考えて行動することができました。」（Ａさん）

「入学前までは劣等感ばかりだったんです。それが、先生の激励をいただいて、『ああ、自分はこれでいいんだ』という、いわゆる自己肯定感でしょうか、『私は明るくいこう！』という、自分の中での核ができたと思います。それまでは一つ一つのことに自信がなかった、例えば自分の考えとか。でもこの３年の中で、いろんなところで戦って、『今は100％じゃなくても、今の自分はこうなんだ、これでいいじゃないか』と思えるようになった。そういう自分の意見を持つ、考えを持つという訓練を受けさせていただいたと思う。」（Ｈさん）

「入学前はおそらくおとなしいタイプだったと思います。それが６年間で鍛えられたという感じでしたね。みんな団子になって鍛えていただいたという感じです。」（Ｄさん）

「変化はいっぱいありすぎて…私には冷え冷えとしたところがあったんです。家庭が大変だったので、他の人たちよりは精神的な気苦労が多く、みんなが子どもに見えたんです。それもあって、表面では仲良くしていても、心を開いて話そうというのがなかったんです。でもあるときから心を開いて、みんなから意見を聞いていこうと思うようになったんです。」（Ｃさん）

「中学時代、何となく友人関係も楽しくなかったんです。性格もちょっと暗かったと思います。高校に来て、今までの自分を取り払って、使命に気づくことができた。自分から『学園に行こう』と決めて行ったことは誇りです。池田先生はどんな人だろうと、わかりたいと思って行ったんです。先生からは、13、14歳くらいの女子を大人のように一個の人格として尊重して、育てていこうという思いが感じられた。これが本当の自分だ、先生と共に生きていこうと思えたんです。今から振り返っても学園時代は自分の人生を決定づける３年間だった。これがなかったら自分は違う方向に行っていたかもしれませんね。」（Ｅさん）

「４月11日の（第１回）入学式で先生に出会って、ふるさとのように温かい先生を見たんです。本当に家族のように感じて、すごいなと思いました。それから３年間、先生の真実の姿を知ることができてよかった。あのときの３年間は10年分くらいあった気がします。」（Ｅさん）

これらの語りを見ると、対象者たちがそれぞれの表現の仕方で自身の変化についてふれている。たとえば、Ａさんは「心が自由になった」という言葉を用いており、創立者である池田に自分の全存在を受け入れてもらったことにより、今まで不自由を感じていた心が解放されたと感じたのであろう。同じような語りがＨさんにも見られた。彼女は劣等感を自己肯定感に変え、『今の自分のままでもいいんだ』と現実を受け入れることができるようになったという。池田の創立者としての生徒一人ひとりを温かく育む心が、当時の在校生にも伝わったのであろう。また、Ｅさんは、中学時代をふりかえって「なんとなく楽しくなかった」と語っているが、創価女子学園に入学して、「使命に気づくことができた」と自身の中で大きな変化を感じている。彼女は、池田がどのような人物なのかを知りたくて、求めて学園に入ったという経歴があるが、そのことを誇りだと語っており、10代の少女に対して、一個の人格を持った存在として尊重しながら接する創立者のふ

るまいについてもふれている。そして、池田を人生の師匠として「共に生きていこう」という決意をするという語りからも、Ｅさんのその後の人生において、池田が与えた影響は大きいといえる。

ｅ．学園生活の中で特に印象深いことをあげるとしたら、なんですか。

ここでは、学園生活においてクラブ活動や行事など、個人的に印象に残った出来事を語ってもらった。Ｆさんは第１回入学式での誓いの言葉についてふれている。

「一期生で何もわからない状態でしたが、とにかく受験しました。入学式のときに誓いの言葉をすることになったんです。そのとき担当してくださったのが原田先生でした。この入学式のことを（『新・人間革命』の）「希望」の章に書いていただいてびっくりしました。入学式の様子が書いてあったのですが、そんなところまで詳しく書いてくださるなんて思わなかった。15歳の時の私が書いたままの原稿を出してくださったんです。」（Ｆさん）

この言説は、小説『新・人間革命』にみることができる。第１回入学式で、高校新入生代表の誓いの言葉を述べる場面がある（池田は、小説の中の役名で「山本伸一」となっている）。

次は高校代表の「誓いの言葉」である。
メガネをかけた、勤勉そうな乙女が進み出た。
「……私たちは、創価女子高校の完成を夢にまで見ました。
その一員となる日まで、自分のことのように心配し、励ましてくれたお友だちや、わがままな私を見守り、育ててくれた両親には、本当に感謝しています。
それにも増して、私たち一人ひとりに、大きな期待をかけ、こんなにすばらしい学校をつくってくださった、創立者の山本先生に対しては、ただただ、感謝の気持ちでいっぱいです。
その温かい真心にお応えするためにも、私たちは、将来、社会のためになる、力ある人に成長することをめざします」
彼女の誓いは、自分にかかわるすべての人への深い感謝と報恩の言葉から始まったのである。感謝は、心の豊かさを意味する。感謝のある人には喜びがあり、幸せがある。
伸一は、その豊かな心が、さらに、豊かさを増すことを祈りながら、彼女の言葉　に耳を傾けていった。
「誓いの言葉」は、一期生の使命に言及していった。
「私たちは、幸運にも一期生となることができました。そのことを誇りに思うと同時に、使命というものを、強く自覚しなければなりません。
創価学園とは、どんな学校だろうと注目している人たちは、学園生の日常の姿や行動を通して、学園の教育理念や創立者の考え方を、知ろうとしているのではないでしょうか。
創立者の人間教育の理念に賛同し、ここに集った私たちは、その第一歩として、『良識・健康・希望』というモットーを、日々、実践していきたいと思います」
まさに、教育理念も、建学の精神も、すべては生徒、学生という人間の行動に表れる。そして、人も、社会も、それを見て評価を定める。人間の振る舞いこそが、一切の結実なのである。
それぞれの「誓いの言葉」には、学校によって教育されるのを待っているという、受け身の姿勢は感

じられなかった。自分たちこそが学園建設の主体者なのだという誇りに貫かれていた[5]。

ここから、池田がいかに創価女子学園の１期生に期待を寄せていたか、また１期生自身も自らを学園建設の主体者としての自覚を持っていたかがうかがえる。筆者も今回のインタビューの回答者たちから、卒業して30年以上がたった現在でも、おのおのが学園の伝統を作る主体者であったという当時の思いを熱く感じることができた。

また、Ｂさんは第１回の入学式の指導にある「平和」という部分が自身に大きな影響を与えた点について述べている。

「『地球は大きく、自分たちは小さいが、平和の戦士として巣立って行ってほしい』と聞いたときに、『こんな私でも何かができるのか？』と思った。それで調子に乗ったという感じでしょうか(笑)。あのスピーチはものすごい衝撃でしたね。こんな年端もいかない私たちに、ここまで激励したくださる人なんだ。池田先生という人はこんなにすごい人なんだ、母が言っていたのはこういうことだったんだなと思いました。ここで自分の一つの方向性が決まりました。」（Ｂさん）

「一番の衝撃は第１回入学式でした。池田先生との初めての出会いでした。父と母から先生にお会いしたときの話を何度も聞いていましたが、自分ではよく分からなくて、そこで初めてお会いしたんです。私は小学生の時にタンザニアにいました。その国はもともとイギリスの植民地で、まだ混沌としていて、国としては素晴らしかったんですが、建国の途中という感じでした。ちょうど社会主義の導入をし始めていたときで、白亜主義がはびこって、黒人への差別がすごかったんです。そこで、貧富の差、人種差別を目の当たりにして、心が痛む経験をしました。」（Ｂさん）

彼女の語りは、1973年４月11日の創価女子中学・高等学校の第１回入学式のスピーチにみることができる。創立者である池田は「良識」「健康」「希望」のモットーをふまえたうえで、「伝統・平和・躾・教養・青春」の５項目にわたって指導を行った。彼は、「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という信条を一人ひとりが培ってほしいと述べたうえで、「地球は大きく、この学園は、その地球から見るならば、ケシつぶほどのものであるかもしれない。しかし、未来の平和への道を考えるとき、皆さんのこれからの実践は、やがて地球を覆うにたる力をもつはずである、と私は確信したい。なにゆえなら、原理は一つであるからであります。皆さんのささやかな実践は、そのまま人類の平和の軌道に通じないわけはないからであります。かくて、平和の真の戦士の卵が、この学園から陸続と育っていっていただきたい。これこそ、女性の生涯を崇高にする唯一の信条であることを私は信じて疑わないからである。」[6] と語っている。池田の教育思想の一つの特徴でもある、平和への強い志向性が表れている箇所でもあるが、Ｂさんは、自身が入学前に滞在していたタンザニアでの経験をふりかえって、「平和」というものについて考える

---

[5] 池田大作　『新・人間革命』第17巻、聖教新聞社、2007年、127－129頁。
[6] 「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、225－226頁。

機会があったという。そして、このスピーチを聞いて、将来の方向性を決めるに至ったと語った。彼女はその後、高校２年の時にイギリスへ留学をし、そのままイギリスの大学を卒業後、外資系の企業に勤め、現在は同時通訳として活躍している。この入学式の指導は、今から振り返ると、彼女の人生に対して大きな影響を与えるものだったと考えられよう。

学園時代に印象に残ることと言えば、希望祭や健康祭といった各行事があげられるであろう。特に、中学１期・高校１期生は先輩がいないため、行事などの運営もすべてが生徒の手にゆだねられており、その意味では自由な部分もあるが、伝統を作るというプレッシャーもあったのではないだろうか。行事について以下の語りが見られた。

「入学した時から最後まで最高学年だったから、行事とか運営に全力で取り組みました。本当に勉強する暇がないというか……（笑）。いつも行事が入っていて、常に誰かがキャップをやらないといけなくてね。それも持ち回りでね、私にとっては突然スポットライトがあたって、『あら、もう、逃げ場がないわ』みたいなね（笑）。人数的には少ないから。高校が５クラス230名、中学が３クラスだから120名、足しても350名。修学旅行の実行委員長や寮長もやりました。これもよい訓練になったと思いますよ。」（Ｆさん）

「自分たちが何かを企画して実行する。自由でしたね。第１回の希望祭があったとき、どんなお店を作るとか、なんでも自由にさせていただいた。家庭的な中での女性像について、折に触れて先生から伺う機会もありました。」（Ｇさん）

このように、多くの行事で、生徒たちが主体者としてその運営に携わっていた様子がうかがえた。また、Ｇさんは、池田との校内での出会いやそのときの会話を語ってくれた。

「（印象深いことといえば）情景がいろいろと思い浮かびます。あの場面で先生が語ってくださったかなという場面。数えきれないくらい先生が学園に来てくださったんです。渡り廊下で先生にお会いしたとき、『先生、今度寮ができるので、名前をつけてください』とお願いしたら、『え、僕がつけていいの？』とおっしゃって。『お父さんにつけていただきたいんです』と、お願いしたんです。先生が歴史をつくってくださったんです。」（Ｇさん）

また、行事のときにカメラマンとして活躍していたＡさんは、その当時のことを以下のように語っていた。

「私はカメラマンをしていました。私が在学していたときは、先生が45歳から50歳までの５年間、学園への来校が一番多かった時期ではないかと思います。先生の一挙手一投足を写真に収めるんだ！という思いでがんばりました。聖教（新聞社）の記者の人と競争するような感じでね。先生の後をついていってはダメで、先生の前に行かないといい写真が撮れないんですよね。でも、私の方が校内を知り尽くしているから、有利だったんです（笑）。聖教の人は先生についていくけど、私は先生が通るだろうルートを予測して張り込んでいました。あるとき先生がフェイントをかけようとなさったことがありました。今から思い返しても、微笑ましいシーンなんですけどね。先生がこちらに来るなと思った瞬間、私たちに気づかれて、ふっと向きを変えられたり。そうしたら、こちらも鬼ごっこのように懸命に追いかけて。先生も笑っておられました。」（Ａさん）

その当時のことは、創価女子中学・高等学校の開学１年目のあゆみについて掲載されている『希望の乙女』という文集からうかがうことができる。Ａさんは「写真班」というタイトルで原稿を掲載している。彼女は、「その日、私は、カメラマンとして参加した。カメラマン、それはたいへんな仕事である。それにもまして、創立者池田先生を撮影するのである。（中略）盛大なはく手に迎えられて、創立者がお見えになった。私は創立者の姿を見たとたん、今までの不安や心配がふっとんでしまった。そのとき『頑張ろう！おとうさん、私は頑張ります』ただそれだけであった。」[7]と、第１回希望祭のときの創立者との出会いとカメラマンとしての思いをつづっている。また、彼女はこの行事のときに以下の指導が心に残ったと語っている。

「先生はいつも私たち一人ひとりに対して思いを馳せてくださっていると思います。第１回希望祭のとき、野点をしてくださって、先生が『姿は女王、心は勇士だよ』と教えてくださいました。」（Ａさん）

「姿は女王、心は勇士」という指導は、第１回希望祭の折の野点について、文集に書かれている。「オレンジ色をした夕焼けが見えはじめたころ“のだて”において、創立者と、男子校・女子高の代表数名とでお茶会が行われた。交野の夕焼けと“のだて”がぴったりとマッチしていた。その際にお茶のいただき方を一つ一つ説明して下さった。そのとき『女子高の生徒は、姿は女王、心は勇士になりなさい』と指導された。私はもう一度その言葉を口ずさみ、生涯の指針とした。」[8]という部分が、池田の指導を間近で聞くことのできたＡさんの決意があらわれている部分だといえよう。彼女は、カメラマンとして活動したことについて「私は、カメラマンとして活動していくなかにおいて、いろいろと学ぶべき点がいくつもあった。創立者のあたたかい真心に直接ふれ、私の心に新たなる大きな希望がわいてきた。」[9]と記しており、カメラマンの活動を通して、創立者との間に心の交流が生まれていたことを感じていたことがうかがえる。

「（印象深いことや行事について）先生なしには語れない行事ばかりでしたね。なんせ、プール開きさえも先生に来ていただいてという時代ですから。『新・人間革命』で、プール開きに先生がご出席いただけなくてわんわん泣くシーンがあったりしてね（笑）。思い出のない人なんていなかったと思います。」（Ｂさん）

このプール開きについては、小説『新・人間革命』にも掲載されているが、池田が予定されていたプール開きに出席できなくなったことを校長が生徒に伝える場面がある。

---

(7) 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会　編『希望の乙女　創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年、78－79頁。

(8) 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会　編『希望の乙女　創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、79頁。

(9) 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会　編『希望の乙女　創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、80頁。

当日の朝、伸一は、やむなく欠席する旨を校長に伝え、また生徒への伝言を託した。

女子学園のプールの壁には、『先生おかえりなさい』と、ひときわ大きな文字が躍り、生徒たちは伸一の到着を、今か今かと待っていた。

皆が“山本先生は絶対に出席してくださる”と確信していた。

果たして生徒はどうするのか――そこに人間教育の真価が表れる。

いよいよプール開きが始まった。だが、用意した創立者席に、山本伸一の姿はない。

校長の牧原があいさつに立った。

「本日、創立者は、どうしても外せない用事がございまして、ご出席にはなれません」

すると、「えーっ」という声が起こった。

「また、山本先生からは、次のような伝言をいただいております。

『残念ですが、大切な用事があって、今日は、どうしても出席できません。しかし、皆さんが元気なことはわかっています。パンと牛乳を届けましたから、皆さんで召し上がってください』」

だが、生徒たちの落胆は大きかった。目に涙を浮かべる生徒もいた。

牧原は懸命に訴えた。

「皆さんは山本先生からパンなどをいただきました。私は、そこに、皆さんを家族の一員であると思ってくださっている、先生の温かいお心が感じられてなりません。こうした創立者のご配慮の意味をよく理解し、先生が私たちのことを見守ってくださっていると思い、明るく頑張ろうではありませんか。

私たちは今、一人ひとりが本当に開拓者なのか、本当に山本先生の娘といえるのかが、試されていると思います。創立者が来られないからといって、落胆し、元気をなくしてしまうのであれば、甘えているだけではないでしょうか。それでは、先生に、ご心配をおかけしてしまうだけです。

自分は先生の娘であると思うならば、こういう時こそ、元気あふれる大成功の催しを行い、先生にご安心していただくべきではないでしょうか」

生徒たちは、牧原の話を聞くうちに、決意に瞳を輝かせ始めた。

校長の話を終えたときには、賛同の拍手がわき起こった。

皆、気を取り直した。

“私たちは師子の娘だ”と、そこに伸一がいるかのように、元気にプール開きをおこなった。

できたばかりの愛唱歌も、創立者の耳に届けとばかりに熱唱した。

物事が思い通りに運ぶことなどないものだ。むしろ、予想外の事態に苦しみ、落胆を繰り返すのが現実といってもよい。しかし、その時に、めげずに、明るく突き進むなかに、人間としての成長があるのだ[10]。

これほど、当時の創立者と生徒の精神的な距離が近いことは、一般の私立学校にはなかなか見られないことであろう。また池田の欠席という事態も、生徒一人一人の成長へとつなげていく契機としてとらえているところは、すべてを人間教育の糧にしていくという創価学園ならではの教育方針の一端を反映しているともいうことができるのではないだろうか。

また、Ｉさんは健康祭のときの蛍会結成の時のエピソードを語ってくれた。

「第１回健康祭の場面です。高校３年時、昭和50年10月６日の第１回健康祭前夜祭にご出席くださった創立者より、卒業生の誓いを『螢の光　窓の雪とうたわれた求道心にも含めて螢会と命名しよう』と言ってくださり、生涯の方向性をご指導くださいました。」（Ｉさん）

---

[10] 池田大作『新・人間革命』第17巻、156－158頁。

創価女子学園卒業生の会を「蛍会」（結成当初は表記が「螢会」となっている）と命名したことに関しては、一昨年の筆者の論文[11]でも記されているが、蛍のいる学園に象徴される自然豊かな教育環境や、歌に出てくる「ほたる」に象徴される求道心という観点から池田が「蛍会」と命名したことがうかがえる[12]。蛍会の結束は固く、卒業後30年以上経過した現在でも、同窓会が開かれるなど、池田の指導通りに卒業生らが生涯にわたる友情を築いている様子がうかがえる。

「中学３年の希望祭で、実行委員をやっていてシナリオを担当しました。『マイウェイ』を歌うことになっていました。そこで、『私の中に学園がある』という言葉をつくって、自分で、ああそうだなって。自分が学園を体現していく一人なんだなということを自覚した、その瞬間を覚えています。」（Ｃさん）

Ｃさんの語りからは、「自分の中に学園がある」という言説が見られた。彼女は卒業後韓国に渡り、26年間滞在したのちに、２人の娘さんが創価大学に入学することになり、数年前に親子で再び日本に戻ってきている。インタビューでは、彼女が学園卒業後、韓国の名門大学に進学、その後就職、結婚などの出来事を経て滞在する中で、創価女子学園の卒業生としての姿を周囲にどのように示すべきかについて常に考えていたと語る場面もあり、この言説は彼女の精神的骨格の一つになっていたとみることができる。

また、Ｃさんは池田に対して直接報告を試みた経験について、以下のように語ってくれた。

「高１の４月か５月に、寮生の新入生を呼んでくださって、茶話会をしてくださったんです。先生は『体は大丈夫かい』などと心配してくださって。私は、そのとき生徒会の執行部の選挙が終わったばかりだったので、先生にご報告しようと思って、『先生!!』と大きな声でお呼びしたんです。でも２回とも無視されました。３回目に『先生!』と言ったら、こちらを向いて『うるさいんだよ』と言われたんです。『（君は）ホントに声が大きいんだよ』と言われたんです。そして、今度は校長先生に対して『お茶を飲むときはお茶を飲むとき、話すときは話すとき、というように“けじめ”をつける教育をしなくてはいけない』と言われたんです。それから記念撮影をすることになったんですが、その席上で『僕は、男みたいな女はいらないんだ』と言われたんです。『羊1000匹よりも獅子一匹だ』と言われて。私は（先生に叱られた）そのことがすごくショックだったのですが、学園の先生方は、『（先生に）叱られてよかったねー。これで、（Ｃさんの）一凶を断ち切ることができるね』と言うんです。それで人生観が変わりました。自分の傲慢な鼻をへし折られたというか、本当に池田先生にも、学園の先生方にもご迷惑をおかけしたなと反省をしました。自分の周りがまったく見えてないってことがわかっていなかった、それは良くなかったと反省したんです。」（Ｃさん）

茶話会という静かにお茶を飲む雰囲気の中で発言したことを池田に注意されたＣさんであったが、その後、自身の内面の変化について以下のように語っている。

「それですごく反省したんです。すべてのものから学べ。自分にはこの思いが足りなかったなって。そ

---

[11] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、30頁。

[12]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、266頁。

れまでは、いわゆる表に出る目立つ仕事でも物おじせずにどんどんやっていたのですが、それからは草刈りとか、裏方の仕事をやるようになったんです。桜同好会、蓮同好会のような、地味ですが自然を守る活動もしていました。」（Cさん）

「その後、韓国に行って、自分と他人を見る目が養われた。自分が正しいから、相手も当然わかってくれるというのは違うというのがわかったんです。それぞれの国の文化や風土があるし、いろんな歴史があるので、自分の論理を押し通すのはよくないと思いました。また、こういう考え方を学園で学んで、韓国に行けたのはよかったと思います。」（Cさん）

彼女は、池田に注意されたことで、周りの状況を顧みずに自分の論理を通すことの誤りを指摘されたことに気づき、この部分を直すことができたことが、その後の彼女の人生にもよい影響を与えていると指摘している。些細なことだったかもしれないが、Cさんにとってこの池田とのやりとりが、彼女の人に対する心構えを変える一つの契機になったことが伺えるといえる。

②　今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問

a．今となって学園生活はあなたにとってどのような意味をもっていますか。

これは、卒業後30年以上たった現在の自分として、あの当時の学園生活をどのように意味づけているかについての問いである。

「先生を誇りに思える心――これが学園で培ったものです。自分の最高の師匠が池田先生だと思って動けることが、本当の誇りなんです。先生という最高の人格を10代のときに見ることができたのは宝。あれ（学園時代）がなかったら、すごくひねていた人間になっていたかもしれません。すべて人のせい、社会のせいにしていたかもしれない。」（Aさん）
「私は先生に会えたから、人間を信用できるようになれたんだと思います。先生に会えなかったら、大人なんか信じられなかった。この６年間がなければ、今の人生とは全然違うと思います。それまでは社会に対する不満、大人に対する不信、理不尽さをいっぱい感じていた。先生に出会って、その偉大な人格に出会った瞬間、心が解放された気がするんです。自分のすべてを受け入れてもらえたというのは大きい。自分を卑下することもなく、ひねくれることもなく、『いろんな人がいていいんだ、それも全部大丈夫だよ』と言ってくれた先生がいたからです。先生の温かさ、大きさ。それがなかったらどんな人生だったろうなと思います。」（Aさん）

上記のAさんの語りからは、学園生活や池田との出会いが、彼女の人格形成に大きな影響を与えたであろうことがうかがえる。特に、池田との出会いによって、「人間を信用できるようになれた」という語りや、「学園時代に自分をすべて受け入れてもらえた経験があったからこそ、現在がある」という語りは、彼女にとって、この学園生活が何物にも代えがたいひとつのエポックであったとみることができるであろう。また池田の人格について、当時海外からの来賓を学園に招く際に、よく生徒が同席することがあったようであるが、そのときの池田のふるまいについて、Aさんは以下のように語っていた。

「一流の人をお出迎えする。これも生きた教育であり、訓練ですよね。先生のお客様をお迎えするお姿から学ぶことができました。そこで驚くことは、先生のお客様への態度と私たちへの態度に一分の違いもないことなんです。先生が、松下幸之助や吉川英治と話すときと、私たちに接するときと同じなのよ。そういう人たちとの対話や先生のお客様に対する最敬礼の姿勢を見せていただくことができました。こうした先生のお迎えのお姿を見せていただく、この機会をいただいたことは本当に宝です。今から考えてもそのこと自体が最高の人間教育といえるのではないかしら。」（Aさん）

ここで、一流の客人に対する池田の態度と、生徒に対する態度の間に違いがなかったという語りが見られた。このAさんの語りから、一人ひとりを最大限に尊重しながら、最敬礼の姿勢を持って接する池田の人間としての振る舞いの一端がうかがえるといえる。また、10代のときにそのような池田の姿を間近にすることによって、一流の人間のあり方について思索を深めることができたことは、Aさんにとって貴重な経験だったといえるだろう。

「学園時代の価値観が今を作っているといっても過言ではありません。傲慢な言い方かもしれませんが、正邪は間違えないと思う。それは先生から教えていただきました。『自らが／心の中で／指揮とりて／一人も残らず／幸福勝ち取れ』という指針をいただきましたが、これは、先生がこれだけのことは、学園で私たちに教えてきたよとおっしゃっているのだと思います。人間として、何が正しくて、何が悪か、これをしなくてはいけない、これはしてはいけないというようなこと、自分の中のこのような価値判断の軸はぶれないと思います。」（Aさん）

また、善悪の価値判断の基準についても、学園時代にその核となる部分を培うことができたという語りがAさんから見られた。

Gさんは、創立者である池田が生徒に寄せる思いや生徒と池田との距離について言及している。

「(学園時代は) 先生と自分との間に何もなかったんです。自分たちの思いを先生はみんなわかってくださっているんだという思いがありました。無条件に、『君たちは一流の人になるんだよ、君たちが社会を変えていくんだ、大丈夫だよ』と言葉をかけてくださったこと。ここまで信頼してくださると、力が出ますよね。こんなちっぽけな可能性を持った人間に対しても、心をかけて、一生分の激励をしてくださいました。」（Gさん）

ここから、創立者が一人一人の生徒のありのままの姿を受け入れ、温かく包み込みながら、将来に思いを馳せ、信頼を寄せている様子がうかがえる。この池田の温かく広い心に触発されて、彼女も卒業後、教育の道を進んだと語っていた。

「女性としてその後いろんなことを経験していますが、とにかく学園時代に最高の思い出を作っていただいたので、これがあれば一生何があっても生きていけると思うんです。この学園時代がなかったら、今の私は考えられません。環境というのが大きいと思います。平安絵巻のような学園生活の毎日でしたね。自然の中で過ごすと心が豊かになる、こういうことを教えてくださったんだなと思います。それも先生が意味づけてくださったんだと思いますが。」（Bさん）

「この時代は私にとっては原点です。あの時がなかったら今はない。かけがえのない友情を築けたのもよかったです。」（Dさん）

「卒業後、創価大学へ進み、創価学会本部に勤務し、創価の道ひとすじに生きて参りましたが、人生のすべての原点は女子学園時代にある、といっても過言ではありません。『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』との人生の根本となる哲学を定めさせていただいた意味がありました。」（Ｉさん）

「受験するときは『先生の作った学園で学びたい』という思いがありました。３年間学んで出てみたら、『先生との思い出』はもちろんのこと、あと『友情』、この２つが自分の一生涯の財産になりました。」（Ｆさん）

ＢさんやＤさん、Ｉさんの語りからは、学園時代の思い出がなかったら今の自分はないという、いわばその時期を自らの原点として語る表現が見られた。この傾向は一昨年の調査[13]においても多くの対象者にみられることであり、３年間もしくは６年間の学園生活を、自身の人生を方向付ける精神的基盤として重要なものと位置付けていることがわかった。また、生涯にわたる友情を築けたという語りも、ＤさんやＦさんにみられた。

Ｈさんは、学園時代を通して自主性と培うことができたことが財産だと語っていた。

「一番は自主性をしっかりつくってもらったことです。揺るがない自分自身でしょうか。３年間を通して、自立の心を養えたと思います。人に頼らないというか。私は一人で大阪に出てきて下宿して、誰とも違う人間なんだと。そこでしっかりと自分を見つめることができました。」（Ｈさん）

「１期生の特徴として、『何があっても揺るがない』というのがあると思います。それは先生に編み込んでいただいた、毎日先生を考えることができた３年間だったからだと思います。私自身は、自分が先生の娘でいいのかという葛藤がありましたし、優秀な友人を見てうらやましいと思っていました。でも、『自分は自分で生きていく、芯をしっかりもって揺らがない』というのが１期の共通点じゃないかと思います。だから誰にも相談しないですね（笑）。先生のことを思っては悩みますけどね。」（Ｈさん）

Ｈさんは１期生の特徴として、「揺らがない」という点をあげていた。特に創立者の池田と自分との関係についての思いについてそのような語りが見られた。同じような語りが、Ｅさんにおいても見られたので紹介したい。

「先生との出会いによって、人生の方向性もだいぶ変わりました。（私の）子どもは『１期の人たち、お母さんの友だちはみんな同じ雰囲気があるよね。』と言うんです。どんな雰囲気かというと、『主人や子どもはどうでもいいから、とにかく私は先生を求めていくの！みんな、ついてきなさい！』みたいな感じだそうです（笑）。」（Ｅさん）

---

[13] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、21－22頁。

このように、高校１期生の特徴として、『創立者と自分』という一点が学園時代の薫陶を通して、揺るぎないものとしてきちんと定められている可能性が示唆された。またこの『創立者と自分』という観点は、『師匠と弟子』を基盤にした学園精神の伝統を形成する一つの精神的骨格となったともいえよう。

Ｈさんは、社会に出て困難な状況に陥った時に、学園時代の思い出が自身を救ってくれたエピソードについて語ってくれた。

「学園時代に悩んだこととか苦しかったことは一切覚えていないんです。あれほどいろんな悩みとかあったと思うんですが、嫌な記憶、苦しい記憶がないんですね。人生の節目で、最大限に苦境に立たされるときがありました。そのときにやっぱり、なにくそって思って、一番支えになるのが、あの学園時代の３年間だった。私にとっては、そこに戻れる、命が帰ることができて、またそこから頑張れるんです。そういう場所があるのがありがたい。一人の部屋で、（学園の）愛唱歌をガンガンかけて、その当時の指導をひもとくと、『本当にこんなことで負けていられるか！』と命の底からの勇気をいただくんです。それは先生がいらっしゃるからなんですよね。先生が見ていてくださるから。それは当時の自分の思いですよね。自分自身が一番ピュアだった頃、『先生のご構想通りの女性になりたい』という思いを持っていた、それを純粋に求めていたとき、そしてそんな学園生を先生が命がけで守っていてくださった、そのときに戻れるんです。」（Ｇさん）

Ｇさんは、職場で誹謗中傷をされたりと、大きな苦難を受けている状況下で自分の精神を支えてくれたのは、学園時代の思い出であり、当時の自分の決意や創立者との絆であったと述べている。卒業して30年以上経過したにも関わらず、当時の思い出がここまで彼女を勇気づけ、立ち直らせる契機となっていたのかと、これは筆者もインタビューをしていて感銘を受けたエピソードであった。

ｂ．もし、高校１年生に戻って、学園生になるとしたら、また学園生になりたい（学園生活を送りたい）と思いますか。

この質問に関しては、今回の対象者全員が「戻りたい」「また学園生活を送りたい」と回答した。その質問の際に、「では、戻ったとしたら、今度はどうしたいと思いますか」とたずねると、以下のような回答が見られた。

「もちろん（戻りたいと思います）。（今でも）そのときの友だちと会った瞬間、もとに戻れる。会った瞬間、もう現実に学園生になってる気がするんです（笑）。今でもあだ名や呼び名とかそのまんまだし。あのときはみんな学園生でしたが、今は主婦してたり、通訳してたり、フリーターから社長になった人もいたり、ホントそれぞれですけどね。」（Ａさん）

「今すぐでも戻りたいですね。やりたいこと？おんなじことをやりたいですね(笑)。今の学園生は（勉

強とか）大変だって聞いてるから。」（Bさん）

「はい。１期は色々実験台のように、先生方も試行錯誤だった部分もあると思います。授業ももちろんありましたが、行事の準備とか多かったし。一つの授業を何回もやったり、一つの議題について何度も話したりしましたね。何をやっても伝統になったという時代ですよね、それで、わが道を行く人たちが増えていったんだと思います。本当にのびやかにさせていただいた。その意味で、勉強はし足りなかったかなと思いますが。でも、楽しかったから、絶対戻りたいです。」（Eさん）

「はい。今度はもう少し勉強したいですね（笑）。先生方も、どうして『勉強しなさい』ってあまり言わなかったんだろうなんて思いますけど。行事も多かったですしね。」（Fさん）

「はい。今度は本をいっぱい読みたいですね。（自分の心が）いじけていることは意味があったんでしょうけど、もっと早くその状態をくぐり抜けておけばよかったと思います。」（Hさん）

「はい。素晴らしい自然環境、また教育環境に恵まれ、情操豊かな人間教育を情熱をもって打ち込んでくださる学園は世界のどこにもないと誇りに思っているからです。」（Iさん）

これらの回答から、もしもう一度学園生活を送れるなら、勉強をしたい、本を読みたいなどの意見が読み取れることと思う。どの対象者も、懐かしく学園時代を思い起こしながら語ってくれた質問でもあった。

c．今になって思う自身の学園生活のよかったところ、反省点はありますか。

学園時代がんばったこと、打ち込んだことに関しては、以下のような回答がみられた。

「３年間、無遅刻無欠席で熱が出ても楽しく学園に通いました。一つ一つの出来事が夢のようでした。すべてが創立者とともに歴史と伝統を築いているのだとの喜びに満ち溢れていました。」（Iさん）
「片道２時間の通学をやりきれたことです。暑い日も寒い日も眠い時も空腹時も、常に池田先生のことを“お父さん”と慕い続け、娘として最高の青春を送れたことに何の悔いもありません。学園建設（級長会活動、クラブ活動、定期考査）全てが黄金の思い出としていつまでも光り輝いています。『学園時代を悔いなく送れた人は、生涯悔いない人生を生きれる』との創立者の言葉を深く実感する昨今です。」（Iさん）

Iさんが通学時間が２時間近くだったにも関わらず、無遅刻無欠席を貫いたということから、彼女の学園に対する並々ならぬ思いを読み取ることができる。これと同じ語りは、一昨年の調査の対象者たちにも見られた[14]。

また、Aさん、Bさん、Gさんは、学校新聞である「創価女子新聞」の編集委員会に入ってお

---

[14] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、23－24頁。

り、当時の様子を懐かしく語ってくれた。

● 新聞委員会のこと

「(学園時代は) それぞれが自分のしたいことをしていたような気がします。私は新聞を作った6年間でした。1期だから、すべてが学園を作る、伝統の第一歩になる活動だった。振り返ってみると、それぞれみんなしたことがあったと思う。私はカメラと新聞づくりの6年間だった。」(Aさん)

「(頑張ったこと) 新聞作りですね。ガリ版をつくるとき大変だった。毎週やろうと思うと、大変でね。また原稿をチェックする原田先生が厳しくてね。すぐボツになったりして。第1号を先生にお届けしたら、『僕が一番の愛読者だよ』とおっしゃってくださって。ローラーに焼き付けるから、手も汚くなる。ホントに原始的なやり方だったの、手刷りって感じ。これを6年間、作っていたのよ。原稿を仕上がるのが、発行日の一日前とかでね。『新・人間革命』にも載っています。手が汚くなるなんて言っていないのに、先生が『爪の中まで真っ黒にして、印刷してくれた』と書いてくださって。『先生は(実際には)見ておられないのに、そこまで私たちのことをわかっていてくださったんだ』と、とても驚いて、感動しました。それも卒業してから30年以上たってからなのよ。新聞作りの苦労は、それが大変だったとかじゃなくて、毎回のことだから忘れられない思い出としてあったんです。でも先生がそれを書いてくださるなんて、思いもしなかったし、知る由もなかった。だから、人間革命に出たときは本当にびっくりしました。」(Aさん)

上記のAさんの語りは、小説『新・人間革命』に載っている。池田がプール開きの報告を受けたあとで、校長がガリ版刷りの新聞を差し出す場面がある。

しばらくすると、女子学園の校長の牧原光太郎ら三人の教師が、プール開きの報告に来た。

伸一は、生徒たちが元気であったことを聞くと、胸をなで下ろした。

「それはよかった。みんな、立派に成長しているね……」

牧原は大きく頷き、ガリ版刷りの新聞を差し出しながら言った。

「はい。生徒たちの成長は著しいものがあります。この学校新聞も、生徒が作りました。名前は『創価女子新聞』といいまして、これが創刊号でございます」

伸一は、その新聞を、一行一行、丹念に読み始めた。生徒が必死になってガリ版を切り、爪の先までインクまみれになりながら印刷する光景が、彼の脳裏に浮かんだ。

「よく頑張ったね。内容にも明確な主張があり、意欲的だね。文を書くことは自分の思想を培うことになる。将来は女子学園生のなかから、一流のジャーナリストも出てほしいね。
この新聞は、どのぐらいのサイクルで発刊するんだい」

「週刊です」

原野秀美が答えた。彼女は、この編集委員会の顧問であった。

「週刊か。すごいね。大変かもしれないが、持続は力だよ。何があっても投げ出さずに続けていくならば、そこから新しい道が開かれるものだ。十年続ければ、大変な歴史と伝統ができる」

「はい。みんな燃えています。新聞を通して全校生の意識を啓発していくとともに、学園建設の記録を残していこうと決意しています」

「ぼくは毎号、隅々まで読むからね。一番の愛読者になります」

以後、新聞は毎週1回の発刊を続け、そのたびに、伸一のもとにも届けられた。

彼は、毎回、女子学園のことを生命に刻みつけようとするかのように熟読したのである[15]。

---

[15] 池田大作『新・人間革命』第17巻、159－160頁。

Aさんは、その『新・人間革命』の箇所にふれながら、こう語った。

「池田先生はそこまで思ってくださったんだ。（学園の）先生だって思っていないことを、書いてくださった。たった1枚の新聞なのに、丹念に1行1行読んでくださった。これが私たちの6年間の励みだったんです。30年後になって、この記事を読んで、改めて感激しました。当時は、『10年続けば歴史と伝統ができるよ』という言葉に励まされて、続けることができていたんです。」（Aさん）

BさんとGさんも新聞委員会のときの話を懐かしそうに語ってくれた。

「新聞委員会に入っていました。新聞は、学園生に対する啓蒙活動の一番有効なツールとして使えますし、池田先生に学園の様子をお伝えするお便りだと思っていました。先生は『僕は愛読者だよ』と言ってくださいました。」（Bさん）

「打ち込んだことといえば、紙面作りですね。今でもそのときのメンバーは絆が強い。本当に大変ですよ、新聞作りは。（顧問の）原田先生が厳しくてね、中高生扱いされなかったの。すごいクオリティの高さを求められたんです。学校新聞なのに、すごくプロフェッショナルだったの。章立てを決める人、構成を考える人、それぞれ役割があってね……」（Bさん）

「（学園時代は）何でもやりましたね。新聞の編集委員を基盤としてやらせていただきながら、一つ一つの行事を傍観者じゃなくて、とにかく主体者としてやるんだ、と思ってやっていた。自分が作る、それが楽しいということを教えていただきましたね。新聞委員の活動は、紙面作りがとても大変でね。でも、文章を書くことを通して、自分の意見を整理することや表現することを学びました。この経験は今もって役に立っています。教育関係の仕事は書くことが仕事ですからね。わかりやすく書いて伝えることが必要ですから。」（Gさん）

当時の「創価女子新聞」作成のときの苦労と、「僕が一番の愛読者だよ」と励ましてくれた創立者の期待に何としても応えたいとの対象者たちの思いを読み取ることができる。また現職の小学校校長であるGさんは、当時の新聞作成の経験が、現在の仕事にも役立っていると述べており、当時の紙面づくりで文章を書く訓練がいかに厳しかったのかを忍ばせる回答となった。

Hさんは、学園時代に頑張ったこととして、校内の美化活動（そうじ）をあげている。

「一番頑張ったのはそうじでしょうか。落ち込んでいた自分を励ませたのが、そうじでした。先生が学園に来られた時に、学園をきれいにしようと思ったので、そうじを一生懸命したんです。みんなあまりやっていないときもありましたが。自分に自信がなくて落ち込みそうなときに、『でも私、毎日こうやってそうじしているじゃない、立派じゃない？』って思ったんです。それでつらいときを乗り越えることができたんですよね。『きちんと地道なことをする、先生の作った学校を磨きたい』という思い、このことは自分だけが知っているから乗り越えられると思います。」（Hさん）

この語りから、そうじという一見地味な作業であるが、それが確実にHさんの心を磨く糧とな

っていたことを読み取ることができよう。

反省点については、以下のような語りが見られた。

「もっとちゃんと勉強しておけばよかったなと思います。新聞委員だったので、ものを書くのは随時やっていたし得意だった。最初の頃の校歌作成委員会に入っていて、歌を作ったりしていました。私たちのころは歌がいっぱいできました。」（Ｅさん）
「お勉強です（笑）。試験前はまあ勉強しましたが、なかなか普段の生活で勉強の機会がなかったんです。」（Ｇさん）
「定期考査の時、平均点より20点はどの教科も上回る結果を出させてください、と祈り勉学に励みましたが、今思えば、何故満点を取るようにと祈り、励まなかったのか悔やまれます。」（Ｉさん）
「もっといろんな本を読んでおけばよかったなというのが反省点です。」（Ｄさん）
「本を読みたかった。学園生活は行事が多かったんですよね。だから、じっくりと読書する時間がなかった。下宿から通学に１時間かかるときは、通学時間に読書していたが、３年目は学校の近くになって、読む時間がなくなった。」（Ｈさん）

もっと勉強をしておけばよかったというのは、前回の調査[16]でも見られた回答の傾向性であった。草創期の学園は、おそらく現在よりも行事も多く、生徒たちも勉強以外の活動で多忙であったろう側面も読み取れる。今回は読書についての語りも見られた。

ｄ．今も心に残っている創立者の指導や原点があれば、教えてください。

これは、在学中の創立者の指導で特に印象深いものについて問う質問である。同期であるＣさんとＤさんにおいては、同じ指導をあげることが多く、以下の回答が見られた。

「今も印象に残っているのは、『忍耐と努力』について、中１のときの第５回希望祭のご指導です。この人生は忍耐と努力を調和をもってやっていくことが大事なんだよという指導だったと思います。女子教育というよりも、人間としてどう生きていくのかという根本の指導だったと思います。」（Ｃさん）

「入学式には先生がお見えにならなかったのですが、７月の（第５回）希望祭に先生が来てくださって原点が一つできました。昭和52年の７月４日、先生が忍耐と努力の人にというご指導をしてくださいました。特に１年生の最初の出会いのときの指導だったので、強烈でした。この言葉は、社会に出るようになってよく思い出しました。でも当時の私には正直難しかったです。なんでこんな難しいことなんだろうと思ったけど。でも今振り返ってみて、本当にそうだなと思います。『努力すべき時に努力できる、忍耐すべき時に忍耐できる』ということは本当に大事だと思います。そのとき、先生は大きくて温かい人だな、先生のもとに来れてよかったな、嬉しいなという気持ちだったのを覚えています。」（Ｄさん）

「寮生との懇談会では、『人に迷惑をかけない。迷惑をかけた人は、ろくな死に方をしないよ』という指

---

[16] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、24頁。

導をいただいたんです」。（Cさん）

「寮生の懇談会、『人に迷惑をかけない』という指導がありました。すごく当たり前のことなんですけどね。より細かくおっしゃっていたような気がする。人間としてのあるべき生き方をより具体的に示してくださったのではないでしょうか。」（Dさん）

「『いかなる時にも希望の微笑を忘れない乙女たれ』という指導がありました。この、『いかなる時にも』というのが大事だと思う。人生、365日毎日が幸せっていう日ばかりではないですからね。その意味で、先生は女性らしさも求めていらしたと思います。」（Cさん）

「第８回入学式のときの『いかなる時にも希望の微笑を忘れぬ乙女たれ』という指導が印象的でした。」（Dさん）

２人とも中学５期生として入学したが、在学中の池田の指導について言及している。はじめの忍耐と努力についての指導は、第５回希望祭のもので、池田はスピーチの冒頭で「あまりに平凡な、そして皆さん方にはいやな言葉であるかもしれないけれども、『忍耐』――耐え忍ぶ、『努力』――雄々しく進んでいく、この『忍耐』と『努力』ということを、いつも人生は保っていかなければならない」[17] と述べている。さらに、後半部分で、忍耐と努力がいかに大切なのかについてより具体的にふれている。彼は、「いろいろな状況のときに、その努力があるかないか、忍耐ができるかできないか。きょうはいやだけれども努力しよう。この瞬間、耐えられないけれども忍耐強く時を待とう。そのようにいやな思いであるけれども忍耐をもって、知性の発露として、立派に現実の社会、現実の人生において調和がとれる人が幸せな人です。本当に立派な人とはどういう人か。努力すべき時に努力する、忍耐をすべき時に忍耐ができる人です。どうかこの二つをこれからの学園生活においても、長い人生においても忘れないでいただきたいと思います」[18] と指導を結んでいる。

また、「人に迷惑をかけない」という指導については、昭和53年の寮生との懇談会での、「どうか皆さんは、お父さん、お母さんに迷惑をかけないで、自分のことは自分でやり、自分らしく責任をもっていってください。その人が人間として偉い人であります。」[19] との言葉にみることができる。池田が女子学園生に対して人（特に両親）に迷惑をかけずに、自分の信念を強く持って生きていってほしいと念願していたのがうかがえる指導である。この指導に関しては、一昨年の筆者のインタビュー調査でも同じ言説を見ることができ[20]、多くの卒業生がこの指導を心に刻んでいることがうかがえた。

さらに、『いかなる時にも希望の微笑を忘れない乙女たれ』という指導は、昭和55年４月10日の

---

[17]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、278頁。
[18]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、279頁。
[19]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、282頁。
[20] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、25頁。

第8回入学式のメッセージにみられる。池田は、「どうか、この尊い青春の三年間、美しい自然の交野の地を舞台にして、生涯、崩れない友情の思い出を、皆さんの胸中にしっかりと刻んでいただきたいと思うのです」と、新入生に対して学園時代にうるわしい友情を育んでほしいと述べたうえで、「皆さん方の新しい人生の出発点にあたり、幸多かれと心より祈りつつ、また『いかなるときも希望の微笑を忘れない乙女たれ』と念願しつつ、私のメッセージといたします。」[21] と結んでいる。

このように、CさんとDさんは上記の3つの指導をあげたが、ここまでの一致を見たことは、同時期に入学・卒業した2人にとってこれらの指導が深く心に残っていることを示しているといえよう。

今回のインタビューでは、多くの対象者が、池田が女子学園生に大きな信頼を期待を寄せていること、またこのことが自らの道を切り開く原動力になっていることについての語りが見られた。

「先生からは、『どんな子も幸せになっていくんだよ』という温かい思いが感じられました。自分の成長を待ってくれている人、信じてくれている人がいる。そうした何物にも代えられない思い出や、誰よりも愛されたという思い出を持つことがあれば、特に女性はそれがあれば、何があっても生きていけると思ったんです。」（Aさん）

「先生が『学園生は、どんなになっても守ってあげる』とおっしゃってくださった。これを聞いたら、先生は裏切れないと思った。人間は信頼されることで力が倍増するんだと思いました。」（Gさん）

Gさんの語りは、昭和53年の創立5周年記念昼食会の席で池田が「人はそれぞれどんな宿命、運命を背負っているかわかりません。女性はある面では受身の人生を歩むかもしれない。しかし私は、学園生はどこへ行っても、どこでどのような生き方をしても、どういう結果になったとしても、ぜんぶ心の中に通じるように抱きかかえてあげたい。どのようになっても、私は学園生だけはかばってあげたい。ただ一人私だけは一生涯どのようにいわれても、皆さんの最大の味方です。あの学園生はだめだったとはいいません。全員、心の中に入って、その人をかばってあげたい。それが、私のいつわらざる心情です」[22] と述べたところにみることができる。この指導から池田が創立者として女子学園生一人ひとりを大切な存在と思っているのかが読み取れるが、上記の二人の語りから、その池田の思いをAさんもGさんも真剣に受け止めていることが伺えた。

Gさんは、池田が中国やソ連の訪問から帰国した際に生徒に贈ってくれたお土産についてふれながら、それが自らの将来の道を決めるきっかけになったことを語ってくれた。

「先生が、中国やソ連からおかえりになった時に、切手をお土産にくださったんです。その裏にいろん

---

[21]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、255 頁。

[22]「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、284-285 頁。

な説明がロシア語で書いてありました。その週末、本屋で『ロシア語４週間』という本を買って、ロシア語を勉強しようと思ったんです。　そこで、漠然とですが、将来は教育交流の分野に行きたい、そこでお役に立ちたいという思いが強くなりました。これも先生が一人ももれなく手をかけてくださって、ひきあげてくださったからだと思う。」（Ｇさん）

教育交流の分野に行きたいというＧさんの思いは、創価大学卒業後、小学校の教員となることで実ることになる。池田のお土産に関する語りは、Ａさんにも見られた。

「先生は、海外に行ったことのない私たちに、ロシアの１枚の切手をくださったりすることで、世界に目を開かせてくださったんだと思います。あの当時、ロシアといえば自分の中ではあまりいいイメージがなかったんですが。たとえば、モス子ちゃん人形を校内に飾っていただいたりすることで、ソ連という国がより身近なものに感じられました。そこには先生の平和主義の思い、そこに人間がいるから行くんだという人間主義があると思います。先生のお土産の一つを見ただけで、ソ連が怖い国だというイメージがなくなったんです。」（Ａさん）

また、Ｇさんは、「明るく」というのをモットーにしているが、そのきっかけとなった池田からの指導について以下のように述べている。

「先生から『人生は長いんだから、とにかく明るく。焦ると見栄になるよ。』というご指導をいただいて、なるほどと思った。正直、あのときを振り返ってみると（自分は）焦っていたんだと思います、周りと比べてね。とにかく福運をつけなさいとご指導がありました。そうすれば、もし行きたいところがあったら、周りの環境が、社会が行かせてくれるようになるからと。着実に活動もやって福運もつけて、自分の実力をつけることが大事なんだと教わりました。そうして振り返ってみると、自分の行きたい国ほとんどに、今まで行かせていただいているんです。東京都の海外派遣研修のメンバーに選ばれて、公費で海外に行くことができて、教育交流させていただく機会があったんです。（学園時代に）指導を受けたことが、『ああ、こういうことなんだな』と思うようになりました。『自分が貢献したい、お役に立ちたいと思う分野で頑張っていると、いつか周りの環境がそう動いてくれるんだな。あ、振り返ってみれば、自分のやりたいこと全部叶っているな』と（笑）。でもこのことを高校時代に教えていただいたことはありがたかったと思います。」（Ｇさん）

学園時代に池田から「明るく」という一点と、「実力をつければ、周りの環境がそれを可能にしてくれる」という指導の通りに進んできたＨさんは、実際に教職に就いただけでなく、一番望ましい形で高校時代の夢であった教育交流の夢も果たすことができたといえる。

Ｂさんは高校２年の時に学園を中退してイギリスへ留学することになるが、そのときに池田から直接激励を受けたエピソードについて語ってくれた。

「先生との原点で一番大きいのは高２のときでした。海外に行くのを迷っていたんです。他の人に聞けば聞くほど、どうすればよいかわからなくなっていた。（行くべきなのかどうか）答えが欲しかったんです、それも先生から。私は中１からの５年間、常に『先生ならどう考えられるか、どうおっしゃるのか』

ということばかり考えることが多かった。ちょうど高２の１月に池田先生が来学されました。そのとき、私は（イギリスには）行かないと決めていたんですが、副校長先生が私の手を取って、『こちらのＢさんが、このたび高校を中退して留学することになりました』と先生に言ったんです。実は、そのとき親はもう退学手続きを取っていたんですよね。私はそのことを全く知らなくて、驚きました。今から思えばありがたかったんですが。そのときは、『くそー、大人ってずるい！』思って。先生は私に『行くの？』と聞かれました。でも私は『行きます』って、はっきりと言えなかったんです。どうしたらいいんだろうって思って……先生がもう一回、『行くの？』と聞かれたので、今度は『はい』って少し大きな声でお答えしました。そうしたら、先生はもう一度、３回目ですけど『行くの？』って。ああ、こういうことなんだなと思ったんです。一瞬で、『これが答えだ、行くしかない』って思ったんです。『失敗してもいいじゃないか、イギリスで失敗して日本に帰って来なくてはいけなくなっても、（自分の心が）負けなきゃいいじゃないか！』って思った。『行きます！』って言ったら、先生は『じゃあ行きなさい』と言ってくださったんです。」（Ｂさん）

「（この池田先生とのやりとりを通して）これからの人生で、私が先生から何もかも指示を受けて生きていくんじゃない。どうするのか先生にお聞きして、先生が答えをくださるということじゃなくて、自分が決めたことを師匠として応援してくださる、こういうことなんだなと思った。すべて自分が決めるんだと思ったんです。」（Ｂさん）

Ｂさんは、この瞬間に自分の将来の方向性を決めることができたと語っており、池田とのやりとりが彼女のそれまで逡巡していた心を留学への決意に転換する契機になったことが伺える。

Ｈさんは池田との原点について、大学時代のことについて語ってくれた。

「大学４年の時に教採（教員採用試験）には受からないと思っていたので、進路をどうしようかと迷っていたんです。自分が教師に向いていないんじゃないかと思っていたときに、池田先生から『教師になれ』と言われたんです。先生に直接言われた以上は落ちるわけにはいかないと一念奮起して、東京都（の採用試験）に合格しました。」（Ｈさん）

彼女はＧさんと同じく、創価大学卒業後、東京都の小学校教員として勤め、管理職試験にも合格し、現在校長（インタビュー当時は教頭）を勤めている。彼女の語りから、池田からの激励が将来の進路を開く一つの要因になったことが読み取れる。

Ａさんは、学園時代に読んだ池田の詩についてのエピソードを語ってくれた。

「先生がロワールに行かれた時に、詩を読まれた、そのときのものがあるんです。
『いつの日かあなた達と共に』という言葉。そのときから私たちの夢はロワールだったんです。『ロワールは、きれいなところなんだよ。そこにいつか、行けるようになるんだよ。』とおっしゃってくださって。
卒業してから同期のメンバーと研修で行かせていただくことができました。」（Ａさん）

この詩は、池田が生徒に送った『ロワール』という詩に記されている。

「いつの日か　あなた達と共に　ロワールの大地に　歩みゆく事を　願いつつ。
健康　良識　希望の大地の　ロワールを　めざして。

ロワールには、詩があった。絵があった。曲があった。
ロワールには、人間がいた。自然がいた。太陽と星がいた。
そして、ロワールには　自分がいた。平和がいた。」[23]

この語りから、Ａさんは学園時代からこの詩を胸にロワールへの憧れや世界へ羽ばたくことに思いを馳せていたことがうかがえる。彼女は、結婚後に実際にロワールの地を訪れる研修に参加することができたことを嬉しそうに語ってくれた。

「先生が『ロワールで、この大地に娘たちとともに出会うことを願いつつ―』と言ってくださったから、いつか絶対に行きたいな、行こうと思っていたんです。先生が学園時代に楔を打ってくださったことが、海外への目を開かせてくださり、自分の人生を変えたんです。この研修のときは、寝ても覚めても何をしても楽しかったです。」（Ａさん）

「私だけじゃなくて、学園生一人ひとりがそれぞれに先生と誓ったこと、約束したことがあると思います。だからいまだにつながっていけるのかも。それだけ先生に愛されていたから。」（Ａさん）

Ａさんの語りから、創立者と生徒の強い絆を感じることができる。また、生徒一人一人がそれぞれの形で創立者とつながっていたであろうことが読み取れるだろう。彼女は、この話をインタビューの冒頭で、まだ筆者が質問を始める前から語ってくれた。このことからも、いかにこのエピソードが彼女の中で大きなものになっているかを感じることができた。

ｅ．もし子どもができたら、学園に入れたいと思いますか（もしくは、もうすでに入学させていますか）。

この問いは前回のインタビュー調査[24]でも行ったが、世代を超えた創価教育の継承がどの程度なされているか、また自身の受けてきた教育を子どもにも受けさせたいと考えるかについての問いである。

「もちろん。みんな入れてますよね、学力さえ伴えばみんな入れると思います。うちも娘が中２で楽しく学園に行っています、通学も（千葉からですので）２時間ちょっとかかりますが。」（Ａさん）
「上の子は高２で学園に行っています。自分の受けた教育を受けさせたい、先生のもとへ送り出したいという思いはありますね。特に女子は関西で教育を受けさせたいという思いもあります。」（Ｂさん）
「はい。娘２人を現在創価大学に入れています。」（Ｃさん）
「そうですね。すでに入れてまして、３番目の子どもが中２で高校受験の予定です。理由は、自分が受けた教育を子どもにもという思いですね。私たちのときは在学中に先生にお会いすることが本当に多かったんです。激励の品もたくさんいただきましたし、先生と自分との間に何もなかったんです。でも品

(23)「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、392－394頁。
(24) 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、32頁。

物よりも、創立者がたくさん足を運んでくださったというのが何よりで、先生を常に感じられた3年間でした。先生を感じられる場所が学園だからというのがありますね。」（Eさん）
「上の子ども2人は中学から学園に入れています。先生との絆を作りたい、また先生を身近に感じてほしかった。私自身も学園で一生涯の原点を築くことができたからです。」（Fさん）
「もちろん入れたいと思います。学園のいろんな歴史があると思うので、どの時期の学園に入れたいかというのもありますよね。草創期ならなおさらです。一番下の子どもが小学校から行きました。」（Gさん）
「はい。息子2人とも創価小学校から入れています。なぜかというと、先生が喜ばれるからです。毎回、合格のご報告をするたびに先生が喜ばれるんです。『慶応大学のようだね』とおっしゃって。親が入って子どもも入れるという伝統があることが素晴らしいということですね。自分が受けた教育を子供にもというのはあります。」（Hさん）

なぜ小学校から入れたのかについて、Hさんは自身が学園時代に池田から受けた言葉について以下のように語っている。

「高3の時に、先生が『みんなの子どもができたら、学園に入れてね』とおっしゃったんです。だから、子どもは絶対創価小から入れようって決めていたんです。」（Hさん）
「はい。孫、ひ孫、代々学園に入れたいと念願しております。」（Iさん）

上記の対象者たちの回答を見ると、前回の調査同様、全員が「入学させたい（もしくはすでに入学させている）」と回答していた。Bさんにみられるように、娘の教育は関西創価学園で受けさせたいという語りも見られた。また、EさんやFさんの語りから、1期生として校内での創立者との出会いの数々についての言説が出てくる。彼女たちは学園時代に一生涯の原点を築いたが、わが子にも創立者の池田を感じてほしいとの思いが読み取れる。また、Hさんにみられるように、学園時代に池田から受けた言葉を忠実に守って、子どもを小学校から創価の一貫教育機関に送り出している例もあり、女子学園の卒業生の母校に対する思いはとても強いものだと考えられよう。

③ その他の質問

ここでは、追加の質問として、前回の調査でも見られたいくつかの問いについての語りを紹介したい。

● 父と娘の絆について

女子学園生が、創立者である池田を父のように「おとうさん」と慕う点は、一昨年の調査[25]でも多くの対象者の語りから伺うことができたが、今回の調査でも、創価女子学園の草創期の特徴の一つとして、「父と娘」という観点が見られた。

---

[25] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（2）―」、31頁。

「園子（女子学園生の呼び名）とお父さんという独特の世界。身近な存在で育んでくださるという感じでした。これは、関西独特なのではないでしょうか。先生が近いというのは感じました。『師弟』というよりも『父と娘』という感じでした。」（Dさん）

「私はずっとお父さんとおよびしていましたから。先生との間に何もない。娘として育てられたという思いがあるんじゃないでしょうか、卒業生は。」（Gさん）

「第１回入学式の折、『うちには女の子がいないから、皆、娘にしちゃうよ』と言われたお言葉に父娘の絆の深さを実感し、以来、学園時代３年間は池田先生のことを、実の父親以上の思いで『お父さん』と呼ばせていただいておりました。」（Ｉさん）

Ｉさんの語りは、小説『新・人間革命』[26] でも書かれており、筆者もこのエピソードについては、当時の在校生や教職員から何度も耳にする機会があった。このうるわしい父と娘の絆は、当時の創価女子学園の精神的基盤の一つといえるであろう。Gさんは、当時、創立者の池田に生徒の有志で歌を作成して送ったときのことについて語ってくれた。

「池田先生にお届けする歌を作るとき、音楽の宮田先生が音楽室を貸してくださったんです。歌をお届けしたら、先生がすぐに『天の曲／天にひびけと天の川／金のコーラス／父は聞きけり』と激励のお歌を返してくださったんです。とても嬉しかったです。でも、先生が私たちの思いに、すぐにひびいて答えてくださるということが、どんなに素晴らしいことか、あのときはまだわからなかったのではないかと思います。学園の時は先生がお父さんで、私たちのことを考えてくださっていると単純に思っていたけど、卒業してわかったのは、世界の先生じゃないですか。こんな激務の中、あれほどの激励をわざわざ私たちにしてくださっていたんだということ、そのこと自体にどれほどの意味があったのか、と思うとね……もうどれだけすごいことだったんだろうと思います。きっと教員の方々はわかっておられたんだと思いますが。あのときは、そういうことがもう『ありえない幸せ』だってことはわからなかったんですよね。」（Gさん）

Ｇさんの語りから、当時の池田と生徒との間に、歌を通しての交流があったことが読み取れる。当時、創価学会の会長としても多忙を極めていたであろう池田が、女子学園生への直接の激励をおこない、その成長ぶりを心にとめていたであろうことがうかがえる。Ｇさんはそのありがたさや貴重さ、創立者の思いに卒業後に改めて気づくことになったと述懐している。

「先生は『創立者』でもありますが、『父親』という視点でも考えてくださったのではないかと思います。（当時は）女性は男性によって幸不幸が決まる時代だったから、福運の話とか、（男性に）だまされないようにとか、親心で守ってくださった。男子校は獅子が子どもを落とすような勢いもあったろうけど、女子校は父が娘を守るという感じだった。」（Ｃさん）

Ｃさんの語りにある、福運の話は1977年の創立５周年記念式典における池田の指導に見ること

---

[26] 池田大作『新・人間革命』第17巻、130－131頁。

ができる。彼は、「福運というのは字義のごとく『福を運ぶ』とも理解できます。生命の運河に、何を運ぶかが大切です。人によっては、地獄の苦悩を運ぶ人もいるでありましょう。また、小さな舟に重き宿命の荷物を背負って、やがて沈没してしまう人もあるかもしれません。願わくは、私は皆さん方には、偉大なる生命の船舶に福運をつんで、人生の航行をしていっていただきたいのであります。そのためには、何が必要でありましょうか。それは、明るく太陽のような満々たる生命力と、明朗な笑いと、ふくいくたるわが青春の財産をはぐくんでいくしかありません。」[27] と述べて、女性にとって福運を持つことがいかに重要かについて言及している。また、男性にだまされないようにとの指導は、第4回蛍会総会のときの恋愛についての池田の指導にみられる。彼は「恋愛する場合にも失敗しないでください。もしか失敗したらいってきてください。愚か者ではいけない。だまされてはいけない。女性はちょっと恋愛すると、その人にポーッとなってしまい、世界中が見えなくなって知性が働かなくなる。そこに落とし穴があるのです。不幸になってはいけません。そのためにも、先輩の意見が必要なのです。みんなが幸せになることを祈っています。」[28] と述べている。この指導から、創立者としてだけではなく、親のような慈愛で生徒を守ろうとする池田の思いが読み取れるといえよう。

●「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という指導について

一昨年の調査[29] に引き続いて、今回の調査でもほとんどの対象者が印象に残った創立者の言葉として「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という指導をあげていた。池田は、第1回入学式で、「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という信条を一人の女性として、一個の人間として、生徒一人一人が培っていってほしい[30] と述べている。

「『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指導は、自分の人生の中で、これはどちらを選べばいいのかと迷ったとき、自分の軸として存在していました。私にとっては、大きな指導ですね。『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』ということは、結局私一人が犠牲になることなのかと家族関係で悩んだ時もありました。でも、よく考えていくと、犠牲になるのではなく、両方とも少しずつ幸せになっていくことなんだなと思ったんです。」（Cさん）

「学園時代は『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指導を聞いて、当時は、当たり前のことだろうと思っていた。でも、今は、それは当たり前のことだけど非常に大事なことだと思います。先生が、生きていくためのマナー、規範を教えてくださったのだと思います。」（Dさん）

「最初の入学式でのスピーチは今でも暗記するほど覚えています。『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』……聞いたその当時はそんなにすごいと思わなかったけど、後になればすごさがわか

---

(27)「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、245-246頁。
(28) 創価学園螢会　編　『この道―螢会総会創立者指導―』、1985年、８頁。
(29) 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（２）―」、28頁。
(30)「創立者とともに」編集委員会　編『創立者とともに』、225頁。

ります。これが人間の基本なんだということだと思います。」（Eさん）

「『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指導ですが、これは今自分が教員になって、子どもにも話しています。これはいじめとかにも応用できると思います。（人をからかったりいじめたりして）『面白い』のと『楽しい』のは違うよと。現代は、人の心が軽くなっている。軽く見られがちになっていると思います。ですから、人に対する姿勢の基本である、（『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という）この根っこの平和の哲学を伝えていきたいと思います。それが先生の一番のメッセージだと思います。」（Hさん）

「幸福観についてですが、先生は『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』との指針が、女性の生涯を崇高にする唯一の生き方であるとご指導くださいました。私の幸福観も他人の幸福を喜べることが自身の幸せであることを実感いたします。」（Iさん）

Cさんは、この指導が、自分の人生の分岐点にきたときに、一つの価値判断の軸となったと語っており、DさんやEさんは、この指導を聞いた10代の頃に自分が受けた印象と、現在の解釈とが異なって変化してきているという語りも見られた。これは、前回の調査でも言及した池田の言説の再解釈性[31]の観点といえよう。Hさんは、現職の教員でもあるため、現場の子どもたちに、「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という言葉を伝えているという語りが見られた。また、Iさんは自身の幸福観を規定する一つの軸として、「他人の幸福を喜べること」をあげており、これも池田のこの指導が基盤になっていると考えられる。

3．考察・まとめ

①　創価女子学園の思想的基盤－3年間の学園生活の意味づけとは

本研究では、創価女子学園の卒業生へのインタビューを通して、草創期の学園の様子や、当時の池田の言葉や生徒への指針が卒業生にとってどのような意味を持つにいたったかなどを、彼らの語りを通して明らかにすることを目的とした。

学園を志望する動機については、本人や親、友人や先輩などさまざまな要因によって受験するに至ったという回答がみられた。また、入学してからは、「とても楽しかった」「伝統作りのために積極的に行事に参加した」という回答もあれば、「周りの友人がすごくて、自分は委縮してしまった」などの語りが見られ、全国から集った生徒たちのなかでカルチャーショックを受けていた人もいるようであった。

当時の学園生活で印象に残ったことについては、ある人は希望祭や入学式などの創立者のスピーチをあげ、個人的な出会いについて語る人もいた。また学内の新聞編集委員として紙面づくりに没頭したことや、行事のおりにカメラマンとして活躍したこと、師匠の作った学園をみがきたいという思いから、そうじに打ち込んだという回答も見られ、一人ひとりが草創期の学園建設の

---

[31] 富岡比呂子「池田大作の教育思想―女子教育の観点から（2）―」、37－38頁。

ために自らが主体者となって心をくだいている様子がうかがえた。Gさんは当時の学園生活をふりかえって、以下のように語っている。

「創立者が訪問される海外の国々の話を聞いて、世界の一流の方をお迎えして、一流の話を聞かせていただいて。そして、一流の女性になれと指導していただく、このような経験をシャワーのように毛穴から10代の頃に受けさせていただいたのは素晴らしかったと思います。女子教育として最高に幸福だったと思います。なぜそれがいいかというと、女性は、特に環境が大事じゃないですか。どんなに意志が強くても、力があっても、周りの環境がよくなければ、その命が影響を受けると思います。その意味で、最高の環境で育てていただいた、また教員の先生方の『最高の環境にしよう』という思いも詰まっている状況でした。その中で、学園生みんなが『一流の女性に』という思いで頑張っていたんです。」（Gさん）

彼女の語りから、当時の学園の教育環境がいかに素晴らしかったことがしのばれる。学園の環境が平安絵巻のようで素晴らしかったという話は、Bさんも語っていた。さらに、去年の教員へのインタビューでも、女性は縁に粉動されやすい性質があるため、よい環境のもとで教育を受けることが必要であるという語り[32]が見られた。このことから、女性にとっては恵まれた環境で教育を受けることによって、正しい哲学や価値観を身につけることが可能になり、当時の創価女子学園は池田のさまざまな支援によって、その理想をある程度は実現していたと考えることができよう。

学園に入学してから、卒業するまでの自身の変化については「入学して、今まで不自由だった心が解放された」「劣等感の塊だったのが、『今の私でいいんだ』と自己肯定感を持てるようになった」という語りがみられたが、そこには生徒を一人残らず受け入れて、大きな期待と信頼を寄せる創立者の姿があると思われる。Gさんの語りにみられるように「人間は信頼されることで、力が何倍にもなる」という語りから、創立者の池田に信頼され、受け入れられたという誇りを持つことができたということは、当時の女子学園生にとってとてつもない貴重な経験であり、その後の人生を根底から支えていく大きな心の財産となったことが伺える。池田がまだ10代であった生徒の未来の成功を信じて、激励を重ね、卒業生もまたその師匠の思いに精一杯応えようと奮起する。インタビューをしながら、回答者の語りや、当時のことを懐かしく、そして真剣に話す彼らの姿から、時が経っても揺るがない創立者と生徒の姿をそこにみることができた。

② 卒業生に見られる共通性—前回の調査と比較して

今回は、前回の調査と比較して共通点は数多くあるが、まずは学園生活において、創立者との出会いや、彼をどのように自身の人生に位置付けるかが大きな着目点となっている点があげられた。また、今からふりかえってみたときの学園生活の意味づけについては、「創立者との原点をつくった」をはじめとし、「精神的な基盤になった」「すべての財産になっている」「あの3年間がな

---

[32] 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（3）—」、182頁。

ければ、今の私はない」など、創価女子学園での生活を、自身の人生の一過程として大きく位置付けている観点が見られた。Ｃさんは学園時代に学んだことの意味づけについて、以下のように語っている。

「私たちが（学園で）学んだことは人間としての核だと思います。あとは何を体現していくかは、その人の自由。自分自身なんだと。先生のご指導は型にはめるというのではないと思います。確かに、生命の尊重といったような仏法的視点はあるけど、一人一人の個性を尊重、またその人にしかできない使命を尊重してくださっていると思います。」（Ｃさん）

さらに、当時の学園時代の思い出が自身を苦境から救い出す精神的な糧になっていたというＧさんの語りや、創立者の池田の指導や直接のやりとりが自身の内面を大きく変えるきっかけになったというＣさんの語り、さらに将来の方向性や進路を決定づけたというＢさんの語りなどから、10代の貴重な時期を創価女子学園で薫陶を受けたことの意味が、対象者それぞれの中で非常に大きなものになっていることが読み取れた。また、Ｇさんの「先生と自分たちとの間に何も（さえぎるものが）なかった」との言葉にみられるように、当時は創立者と生徒の物理的な距離だけではなく、心の距離が近かったことを伺わせる語りが多く見られた。

創価教育の継承についても、前回の調査同様、多くの対象者が自身の卒業した創価一貫教育機関（創価小学校、創価学園、創価大学）を受験させる傾向が見られた。それだけ、自身の受けた教育に価値を見出しており、学園生活の経験が子育てにも影響していることの表れともいえよう。さらに、池田の言説の再解釈性についても、前回の調査と同じ語りが見られた。

また、第１回の入学式の池田の指導にある「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という言葉が対象者たちの生き方を決めるうえで、一つの軸となり、強く印象に残っているという語りが見られた。その意味で、この指導は草創期の創価女子学園の精神的支柱となる指針であったことがうかがえる。

加えて、本研究の対象者は社会で活躍する女性が多かったため、就職してからの自分にとって、学園時代に培った精神性がいかに影響を与えていたかという言説が多く見られたことも、新たな知見といえるだろう。草創期の創価女子学園は、豊かな自然に囲まれた風光明媚な土地に建てられ、当時の基準で見ても十分な教育設備の整った学校であったといえる。その意味で、目に言える物理的な環境に恵まれたことは確かだと思うが、それだけではなく、今回のインタビューを通して、目に見えないもの、つまり学園において培われた精神性というものがいかに卒業生たちの心に楔となって打ち込まれているかがわかった。可視化できないもの、そういったものは数値で測ることが困難なため、本調査のような質的方法によって掘り下げて分析していく方法を取らざるを得ない。ともあれ、建物といったハード面だけでなく、創立者や教職員の思い、「学園生一人ひとりを必ずや社会に貢献しうる一流の女性に育てたい」という強き願いといったものが核となって、創価女子学園という世界が形成されていたのではないかと筆者は考える。

③ おわりに （本研究の限界と今後の課題）

前回の調査をふまえて、今回の調査の対象者は東京在住に限らず、関西在住の卒業生からもデータを取らせていただくことができた。また、対象者たちは主婦に限らず、社会においてさまざまな分野で活躍している女性であり、その意味で調査の幅が多少は広がったと考えられる。しかし、本研究の限界として、インタビュー結果すべてを掲載できなかったという点があげられる。本稿では「創価女子学園時代の創立者と卒業生の絆」に焦点をあてて対象者の語りを分析することになったが、枚数の関係上、同じインタビューで対象者たちから聞くことができた女子教育の意味づけ、また女性としての生き方や幸福観まで考察を進めることが叶わなかった。ぜひ次回の論文では、創立者の示す理想の女性像や、対象者たちの人生を通して見えてくる幸福観、また当時の寮生活や「奇跡の連帯」と言われる学園姉妹の絆などについて掘り下げて考察をしていきたいと考えている。

最後に、今回のインタビューを通して、対象者の語りの中から生まれたさまざまな言説、学園精神や創立者への思いは、池田研究を進める上で新たな研究資料となり、貴重な記録となったことをここに記したい。

【謝辞】

本研究をおこなうにあたり、快く調査にご協力いただいた9名の調査協力者の皆さまに心より感謝申し上げます。長時間にわたってのインタビューにご協力いただき、御礼申し上げます。